
腐幸のマチルディア

螺子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐幸のマチルディア

【Nコード】

N9011F

【作者名】

螺子

【あらすじ】

生れ落ちる場所を選べないからこそ、人はそこに意味を見出したがる。

誕生は奇跡か悪夢か。悲喜劇の幕はまだ下りない。

第一章

痛みや混乱、疑問が引いた後にすつと浮かんできた感情は、意外にも怒りだった。何に、と問われれば彼女も口を閉ざすしかないが、とにかく心は怒りに満ちていた。

薄暗い裏道が無目的に這いずりながら、彼女は腹を立てていたのだ。刺された箇所から止め処なく流れる血が赤い線を描いていく。彼女の生きた軌跡を辿る導のように。それが途中で途絶えてしまうのも、性質の悪い冗談や皮肉のようで、ますます怒りに拍車をかけた。リングム地方特有の薄紅色の髪は、もう深く鮮やかな紅だ。

誰もが寝静まった深夜。いくら王都と言えどひっそりとした学生街では誰かが通りかかるわけでもない。学院の生徒は皆真面目だから、こんな夜中に遊ぶような人間は居ないだろう。

自分の死体が発見されたら、学院の誰もが囁き合うに違いない。

「あいつは馬鹿だったから……」と。

そう、愚かだった。

この身を蝕んでいく死よりも遥かに、彼女は自分自身を厭っていた。

だからという訳でもないが、もうこれ以上生きようとはしていなかった。自身が負った傷の深さはよく理解しているつもりだ。この死によって誰がどんな得をするのかは皆目検討がつかないが、恐らくは自分の与り知らぬところで利害関係が発生していたのだろう。動きを止めて、首にぶら下げた漆黒の十字架を握り締める。

この先に懺悔を聞き届けてくれる神は居ないのだとしても、浅ましく赦しを乞い続けた自分が嫌だった。誰からも赦しを得られない自分が哀れだった。

ああ、あの怒りの正体は——結局罪を背負ったまま、罪を償えなかったまま逝ってしまう、自分への怒りだったのか。それとも。

「お父様……」

欲しいのは神の赦しではないのだと、今更になって気づいてしまった自分への苛立ちか。

嘲りが浮かぶ。——と、ふいに目の前に立つ人影があった。

「血の臭いがすると思ったら……惨いわね」

冷たい空気を震わせて、女の声が降ってきた。ひしゃげた金属が立てる音のように不快な、それを声と表現するのも憚られるような、そんな声だった。とても人間のものだとは考えられなかったが、もう首を上げる力は残っていない。女がどんな姿をしているのかは分からないが、この際悪魔でも化け物でも、何でも構わなかった。これはきつと、逝く自分への最後の憐れみなのだ。最期の最後に起こった小さな奇跡なのだ。

「痛かったでしょう、可哀相に……学生かしら」

女は彼女が死んでいると思っっているようだ。ぶつぶつと言いながら、しゃがみこんでくる。その声はとても耳に障る音だったけれど——籠められた感情は、どこまでも優しくかった。心底相手を想って発せられている、そんな風に思える口調だった。

手が伸びてくる。彼女は力を振り絞って、その手を掴み言葉を発した。

「神の赦し、は……」

「——あなた、生きているの？」

驚きの声には構わず、

「いら、な……でも、これを」

握っていた十字架を示す。本当に欲しかったものは……もう手に入らない。

「これはまた、古い慣習を知ってるのね」

女は決して彼女を制止するような言葉は発さなかった。もう助からない——だからこそ、静かに耳を傾けている。彼女はそう感じ、必死に言葉を紡いだ。

もう灯火は消える寸前。自分の体のことだ。痛い程分かる。

「リングムの……届け……て。お願い、よ。私の……」
——彼女はそこで事切れた。

第二章

「ウィシュナは悪魔に魅入られたんだ、絶対そうだよ」

「あの子、変わってたものね」

「ていうか夜に出歩くとか馬鹿じゃん？」

学友達の噂話を耳にして、ティアロは眉をひそめた。数日前からその話題で持ちきりだ。十日ほど前からウィシュナが行方不明となり、ほどなくして学生街の裏路地で血溜まりが発見されたのは記憶に新しい。傍にはウィシュナの愛用していたポーチが落ちていたという。それはティアロも確認したから間違いはなかった。

彼女と仲の良かったティアロは何度か警備隊に呼び出されたが、特に話すことはなかったためすぐに解放された。ウィシュナが夜に出歩く動機など、むしろティアロが聞きたいくらいだった。

通り魔が殺して連れ去ったのだと警備隊は躍起になって犯人を捜していたが、成果は悲しいほどに上がっていない。学校でも夜道の独り歩きは避けるように、とのお達しがあったが、言われずともそんな人間は居ないだろう。ただ一人、ティアロを除いて。

迎えの馬車が来る前に学校を出て、そびえ立つ教会の影を背負いながら歩く。

鮮やかな夕陽が金髪を赤く染め上げる。ティアロの制服に気づいた人々が、慌てた様子で道を譲った。

貴族の子弟が集まる名門。華やかな学園。――そんなイメージは全て、偽りの仮面に過ぎない。常に誰かの隙を狙い、足を引っ張り、弱者を潰し、強者には擦り寄る。時機が来ればその強者すら踏み台にするのだ。更なる高みへと家を導くため、より高貴な身分の人の目に留まるように。

ウィシュナは決して学校に馴染んでいるとは言えなかった。いつもどこか申し訳無さそうな顔をして、自分からはあまり話さず、必要以上に他人と接しようとしめない。孤立するのに時間はかからなか

った。言ってみれば空気のような子だったのだ。あまりに存在感が薄すぎて、誰も彼女を潰そうなどとは考えなかった。

地方領主の娘というのもこの学院では取り立てて珍しい身分ではなく、むしろ低い方だと言えた。それも標的にならなかった理由かもしれない。

「ここね……」

事件があったという裏路地にやって来た。血溜まりの痕跡が生々しくティアロを見上げている。怖くないと言えば嘘になるが、それ以上に憤りが強かった。

学院での潰し合いにうんざりし出した頃、ウィシュナと出会った。自分にとって彼女の優しさがどれ程救いとなっていたか、ウィシュナは知っていただろうか。周りは「ミンセツト家の娘がどうして」と噂したが、そんなの全て無視した。

そのウィシュナが、こんな寂しく暗い場所で、誰かに殺された。それなのに彼女の父親は、事務的な処理のために、と人を一人寄越しただけで、王都には来なかった。母親は彼女が物心つく前に他界し、二人っきりの家族だったと聞く。たった一人の肉親が無残な最期を遂げたのに、その対応はあんまりではないか。犯人に対して以上に怒りが込み上げる。

ウィシュナを殺した人物を見つけない。そして、そいつを彼女の父親の前に突き出す。

ティアロは「二人」に向かってこう言うのだ――ウィシュナに謝れ、と。

ティアロは唇を噛み締め、血の跡を辿った。路地の入り口まで這ってきたようで、細く長い線が続いている。まるでどこか違う世界へと誘われているようだ。

少し進んだところで、ティアロは足を止める。耐え難い程の腐臭が鼻をついた。

「……もしかして、ウィシュナの？」

この辺りは警備隊が丹念に調べたはずだが……ティアロは鼻をつ

まんで行く。やがて血の道は途切れた。ちょっとした広場になっている場所に辿りついたが、あの路地がこんな場所につながっていたとは知らなかった。広場と言うより、ゴミ捨て場か。残骸の山がそこかしこに築かれている。出入り口は今来た道だけのようだ。

ティアロの足元には大きな血の跡があり、ここで刺されたか切られたか――とにかく傷つけられたのだろうと容易に想像がつく。

ここまで来ておいて、さすがに気味が悪くなって引き返そうかと足を動かしたとき、

「こんな場所で学生さんと会うなんて。よく近づく気になるわね」
いまだかつて聞いたことのない、不気味な声。声というか、音のようだった。

ゴミ山に埋もれるようにして、誰かが座り込んでいる。背格好から恐らく女性だろうと思われるが、頭から足先まですっぽりと黒いローブで覆われてしまっているので確証はない。ゴミとの境界線が非常に曖昧で、声を発さなければ人間が居るなどとは思わなかっただろう。

腐臭は強烈に漂ってくる。耐え難いほどに。加えて、うるさく飛び回るハエや這い回るアレの存在に、これ以上近づく気にはなれない。

「あの、あなたは……」

失礼は承知で、鼻を塞いだまま尋ねてみた。あの人はこんな場所に居て平然としているが、鼻は機能しているのだろうか。そもそも考える力は健在なのだろうか？　いらぬ心配が脳裏をかすめる。

「怪しいと思うけど、別に怪しい者じゃないわ」

なんとなく矛盾した答えが返ってきた。所業や見た目が普通ではない、ということは自覚済みらしい。目深に被ったフードを取るだけでも随分と印象が変わりそうだが……風が吹くたびに強く押さえつけているのを見ると、素顔を晒す気は微塵もないようだ。この時袖から覗いた腕は異常なまでに細く、白い。

「何をしてるんですか？」

「別に何もしてないわ。ここが落ち着くから、ただ居るだけ。それともダンスでもしているようにでも見えた？」

ひしゃげた笑い声が零れる。

——こんな場所で落ち着けるなんて、信じられない。ティアロは顔をしかめて、言葉に代えた。女はそんなティアロを見てより一層唇を持ち上げた。本気なのか、からかっているのか、判断に困る。

沈黙を埋めるように風が吹く。あの臭いが鼻腔を刺した。

「この臭いって、何なんですか。腐ったような……」

「生ゴミもあるから腐ったんじゃないかしら。残念ながら女の子の死体は埋まってないわ」

ティアロの考えを見透かすように女が苦笑した。

「そう、ですよ」

ふう、と張り詰めた糸のような緊張感を息と共に吐き出した。その瞬間、「お嬢様……ティアロ様ー！」と自分を呼ぶ声が耳に届いた。あの声は世話役のジースだ。過保護な男で、何かとティアロの行動に口を挟んでくる。だからこそこうして黙って学校を出てきたのだが、結構早くに追いつかれてしまったようだ。

「あなたのこと？ 早く行ってあげなさい」

声に反応するティアロを見て、女が言った。

「そうですね。もう、あんな大声で恥ずかしいったらないわ」

踵を返そうとして、ティアロは唐突に女に尋ねた。

「お名前は？ 私はティアロ＝ミンセット」

ミンセット家といえはこの辺りでは有名な貴族だが、女はそんなことを気にする風もなく簡潔に、

「マチルディア」

とだけ答えた。

誰も居なくなつたゴミ捨て場で、鬱陶しいハエを払い除けながら

ごちる。齒の奥にはさまってなかなか取れないものを気にしながら。
「ティアロ、か……」

手近のゴミに手を突っ込んで、細切れになった紙切れを取り出す。最終的には数枚の紙片が見つかった。ゴミの中から何かを探し出すのは得意だ。それはマチルディアにとって生きるための技術だった。

「これを作った人は、気が動転してたのかしらね」

奥深くに仕舞い込んでしまえば、風で飛んでいくことはなく、ずっとそこに存在することになる。

ここで起こった凄惨な事件……それを迷宮から掬い出す手がかり。この紙切れはそういうものだった。

しかし、こんな屑のような紙、凶器探しに躍起になっていた警備隊の目には留まらなかったのだろう。その前に犯人も愚かだ。紙切れなど持ち帰って燃やしてしまえば完全に残らないだろうに。よほど頭の回転が悪いのか、見つからない自信でもあったのか。恐らく前者だろう。

「さて、どうしようかしら……」

紙片を丁寧に並べて、その文面に目を落とす。最後にこうサインしてあった。

——ティアロ、と。

第三章

「お嬢様、何度申し上げたらお分かりになるんですか。迎えの馬車が行くまで学院に居て頂かないと」

屋敷に帰る途中、そして帰ってきてからもジースの小言は続いている。

「来るのが遅すぎる。主人を待たせておいて何言ってるの？」

ティアロの返答に、ジースは整えられた金髪を掻いてため息をついた。「あれでもいつもより早くにお迎えにあがったのですが」恨みがましく呟くジースを無視して、さっさと自室へ向かった。この人は黙ってれば良い線いってるのに、どうしてこうも口うるさいのだろう。これでは流れるような金髪も、切れ長の青い瞳も、すべて台無しだ。

「だいたい、あの場所はお屋敷とは反対方向ではありませんか。遅いも早いも関係ありませんよ。ウィシュナ様のことは残念ですが……」

追ってきたジースの話はなおも続くようだ。いつも以上にうるさい。つい先日人が殺された現場に行ったのだから、いろいろな言いたくなる気持ちも分らないでもないが……そのことについてはちゃんと謝っただろうに。

いい加減うんざりしてきて、怒鳴りつけてやろうかと思案していると彼は信じられない一言を放った。

「たかが地方領主の娘では、ミンセット家と釣り合いませんからね。不相応な立場に居たせいで裁きが下ったのかもしれませんが」

「……は？」

彼の言っている意味がすぐに理解できない。今こいつは……なんと言った？

「これを機に是非とも別のご友人を作られては如何ですか？ 将来性や有用性を考えて選ばねば損をしますよ。ディーニ家などという

弱小貴族と一緒に居ればミンセット家の評判も悪くなりかねませんからね、正直少し安心しましたよ」

怒鳴るのも忘れて、ティアロは絶句した。彼の言葉が浸透してくると、一気に怒りが押し寄せてきて、反射的にジースの頬をひっぱっていた。景気の良い音が廊下に響く。

「最っ低！ もう二度とウィシュナの名を口にするな！」

ジースは叩かれた頬を押さえて呆然とティアロを見つめ返してくる。何が悪かったのか、心底分かっていないような顔だ。その間の抜けた表情が神経に障る。

「分かったのか！」

苛立ちに、自然と口調も乱暴になっていく。普段は温厚で通してゐるティアロの、あまりに鋭い叱責に近くに居た侍女数人も目を見開いていた。ジースは一瞬だけ肩を震わせて「了解致しました」とだけ口にした。絶対に分かってないな、こいつ。ティアロはこっそり舌打ちすると部屋に入った。怒りに任せて扉を閉めると「もっとおしとやかにしませんと、お嬢様」ジースの呆れたような声が聞こえてくるものだから。

「うるっさいわね、誰のせいだと思ってるの！」

思いつき扉を蹴飛ばしてやった。

「ティアロ、学校では何も変わらないか？」

食堂に入ってきたティアロに真っ先に投げかけられた父の言葉。ウィシュナのことを聞きたいのだろうが、親の期待に応えてやるつもりはなかった。

ティアロはにつこりと、必要以上に微笑んで答える。

「ええ、順調ですよ。お父様」

「なら良いのだけど……」

答えたのは母だった。「何かあったらすぐに言うのよ」心配そう

に見つめる瞳に、あいまいに頷いた。

「そうだ、ティアロ。お前、馬車が来る前に学校を出たそうだな？」

父の目が細まる。これは怒っているときの表情だ。――ジース、お父様にちくったわね。ティアロは盛大にため息をついた。家族も使用人も揃って過干渉なんだから。勝手に部屋を漁る（しかもジースに命令して！）のは何とかして止めさせたが、きっとティアロの知らないところでも情報収集をしているんだろう。

この前のことで過敏になっているのは分かるが、もういい加減子どもじゃないのだから好きにさせて欲しい。

「学校の近くで、人が一人殺されているんだ。そんな危険な場所をうろうろするんじゃない。迎えが来るまではちゃんと学校で待っていないさい」

「遅いんですよ、お迎えが。待っていられません、歩いて帰った方が早いです」

言い返すと、今度は母が、

「でも、家とは反対の道に居たって話じゃないの。しかもあの、ウイシュナさんが……」

その先は続けなかった。青ざめた顔で「ああ恐ろしい」と言わんばかりに首を振って、

「気になるのは分かるけど、もしあなたに何かあったらと思うと心配で仕方ないのよ」

「犯人探しをしようなどと考えてるんじゃないだろうな？ そんなのは警備隊に任せておけばいい」

犯人。ティアロは小さく、息だけで呟く。この数日間、何の成果も上げられていない警備隊に何を任せられると言うのか。

「それに以前『迎えが早すぎる』と駄々をこねたのはお前だぞ、ティアロ」

父も困ったように、けれど強く反論した。ティアロはその言葉に「うっ」と黙り込む。

確かに、以前もの凄く早い日があり、ジースに「もっと遅く来て」

と要求したことがある。放課後にウィシュナと話をしていたのに、彼が無理やり中断させたからだ。ティアロがまだ待っててと頼むと、「待たせるのも申し訳ないから」とウィシュナは寄宿舎に帰ってしまった。

その時の「それじゃあ、また後でね」という彼女の言葉を最後に、ウィシュナとは永遠に別れたのだ。

ジースが邪魔をしなればもっとたくさん話せたし、もしかしたらウィシュナが通り魔と遭遇することもなかったかもしれない。そう考えると悔やんでも悔やみきれず、同時にジースに対する怒りもいっそう強くなる。たとえそれが理不尽な怒りであると分かっているても、感情は止められなかった。

次に何かあったら父に頼んで追い出してもらおうか。

「あまり我儘を言ってジースを困らせるでないよ」

「私だってジースに困らされています。お父様もお母様もジースを甘やかしすぎではありませんか？」

ぶすつと言い返すも、両親には子ども——子ども扱いされる歳でもないが——の言うこと、と苦笑で済まされてしまった。

「親にとって、子はいつまで経っても子どもなのよ、ティアロ」
それきり、食堂は沈黙に支配された。

第四章

——ウイシュナ。どこへ行ったの？

自室で天井を見つめながら、ぼんやりと考える。

遺体が見つからないということは、どこか遠くへ運ばれたかもしれない——考えたくはないが——見つからない程に、細切れにされてしまったか。おぞましい光景を想像して、首を振る。

あの血溜まりを見るまでは何となく、もしかしたら生きているのではないかと期待とも呼べない淡い感情を抱いていたのだが……現場を見て、そんな思いは吹き飛んでしまった。ありえない血の量。あれが全てウイシュナから流れ出たものだとしたら、命を落とすには十分過ぎただろう。

『それじゃあ、また後でね』

ウイシュナの最後の言葉だ。彼女に「後で」はなかった。約束の時は永遠に訪れないのだ。「後で」なんて言わずに、ずっと話していれば……

「……後で？」

ティアロは後悔という名の思考を中断する。浮かんだ疑問を口にして、眉根を寄せた。

「後でって……何のこと？」

彼女にとっては「また明日」が別れの言葉として相応しかったはずだ。現に、いつもそう言い合って別れている。挨拶というよりは、もはや意識すらしていない、記号のようなものだ。

「また明日」も私達は学校で会い、勉強をしてお喋りをして、別れる。ウイシュナは宿舍へ、ティアロは自宅へ。

言ってみればあの言葉は、そのような当たり前と信じて疑っていなかった、いつも変わらずそこに存在しているはずの「明日」への道しるべなのだ。それなのに「後で」とは、一体どういうことなのか。

「どうして気づかなかったの、私は！」

自分に苛立つ。髪を乱暴に掻いて、唇を噛んだ。

——明日、ウィシュナの部屋へ行ってみよう。何かあるかもしれない。

決心したそのとき、無遠慮なノック音が響いた。

「……お嬢様」

「なによ、ジース」

刺々しいティアロの返事に、扉越しに嘆息する声が聞こえてきた。
「入ってこないでよね」釘を刺して、用件を尋ねた。

「レイスト家から夜会の招待状が届いております。如何なさいますか？」

「レイスト……ファアーノのどこか」

学友というだけで、彼女とはそれ程親しいわけではない。学院では家柄ごとにグループのようなものが出来上がっているが、ミンセツト家くらいになると他者とするまづとも易々と蹴落とされたりはしない。言ってみれば、いつでも擦り寄られる側だ。「めんどくさいなあ……」憂鬱に呟いた。

「恐れながら申し上げますが、レイスト家といえば最近勢力を伸ばしている様子。良い関係を築いておくのも良いと思います」

二言目には、これだ。発言力を強めるだとか、勢力を伸ばすだとか……ジースの頭にはそれしかないのだろうか。彼のそういうところが一番嫌いだった。

ミンセツト家よりも力の弱い家は、誰もが第二のウィシュナになるうとしている。まだそれ程あからさまではないが、ティアロの隣を狙っているのは丸分かりだった。ファアーノもその中のひとりだ。

「旦那様も、お嬢様にご出席なさるよう仰っておりますよ。夜会は十日後です」

「それまでに準備しとけって言うんでしょ？ 分かったわよ」
ティアロはため息をついた。貴族も楽じゃない。

「ティアロさん、来てくださるんですって？」

教室でぼうっとしてしているとファーノが機嫌良く話しかけてきた。教室がざわつく。

一瞬何のことかと考え込んだティアロだったが「ああ……十日後の？」気のない返事をする。すでに九日後となっているが、訂正する気もない。

「ええ、期待してくださいませ。きっと楽しい夜になりますわ」

豊かな金髪をさつと掻きあげて、目を細める。見た目は典型的な良家のお嬢様だが、その笑顔の下にどんな野心を隠しているのか。考えただけでティアロはうんざりする。今あえてこの場で話しかけてきたのだって、レイスト家とミンセツト家の繋がりを誇示したいだけだろう。まだ何も繋がってないしあまり繋がる気もないのだが、それは父が決めることであり、ティアロはティアロの交友関係を維持するだけのことだ。

つまりそれは、第二のウィシュナは決して現れないことを意味する。

（あーあ、馬鹿みたい……）

無言で席を立ち、教室を出た。

すれ違う生徒達の中から、無意識の内に薄紅色の髪を探してしま

う。

（確か、あそこの角だったかな）

廊下の突き当たり。曲がろうとしたティアロにウィシュナが思いっきりぶつかってきたという、なんともありがちな出会いだった。お互い派手に転んで、あまりに見事な転びっぷりにしばらく言葉が出なかった程だ。当事者たちよりも周囲の人間のざわつきの方が大きかっただろう。

そのうちに我に返ったウィシュナが『ご、ごめんなさい……前を見てなくて。お怪我はありませんか？』ぼそぼそと謝ってきた。恐

縮しきった様子に怒る気も失せて『お尻を打ったけど。大したことないわ』立ち上がった。

『本当に？』

胸元に揺れる黒の十字架を握り締めて、ウイシュナが尋ねてきた。後で気づいたが、十字架を握るのはウイシュナが涙をこらえているときの癖だ。

『大丈夫だって言ってるでしょ。私が嘘を言ってるだけでも？』

どうせミンセツト家の娘に怪我させたとか、そんなくだらない心配をしているんだろう。どいつもこいつも、ミンセツト家ミンセツト家とうるさい――少しきつめに反論した。

『う、ううん……そうじゃなくて……で、でも、後で痛かったりしたら、私寄宿舍に居るから……ウイシュナIIディーニを訪ねてください』

そのときのウイシュナの言葉が忘れられない。

『あの、それと、一応あなたのお名前を教えて頂けますか？』

聞くところによれば、彼女は転校してきて間もない時期だったらしい。ティアロの顔を知らなくてもそれは当然だ。普通に暮らしていれば、地方領主の娘と中央貴族の娘ではどうやって顔見知りにはなれない。

ティアロはほんの気まぐれで、翌日彼女の部屋を訪れた。ウイシュナは驚いて、やっぱりどこか痛むのか、傷は深いのかと泣きそうな顔で捲くし立ててきて――ただ遊びに來ただけだと告げたときの、彼女の呆けた顔は今でもよく覚えている。

そして今、あのときと同じように彼女の部屋の前に立っている。合鍵は管理人から受け取っている。検証は済んだようで、警備隊の姿は特に見当たらない。ティアロは深呼吸をして、鍵を差し込んだ。軋んだ音が扉から発せられ、閑散とした部屋が姿を現す。前から私物はほとんどなかった。備品の机やベッド、クローゼット以外の家具も特に置かれていなかった。

よく備え付けのものだけで満足できるものだと、何気なく言葉に

してみたことがあるが、

『そうかしら。十分過ぎるほどよ』

必要最低限。それがウィシュナの考え方だ。

そのせいか、彼女の物が持ち出されても、部屋の印象はさして変わらない。

けれど、確実に――ここから失われた「生活感」がある。もう二度と取り戻せないウィシュナの気配を掴み取ろうとするかのように、ティアロは足を踏み入れた……が、次の瞬間後ろから肩を掴まれる。「誰よ!？」

「お嬢様、探しましたよ」

肩越しに振り返るとジースの呆れ顔があった。「またあんななの?」いつもいつも邪魔ばかりして、本当に苛立つ。剣呑に言い放つと、世話役はこれ見よがしにため息をついて「また、はこちらの台詞ですお嬢様。正門でお待ちになっていてください、と何度申し上げたら分かるのですか」首を振った。

ティアロは乱暴に彼の手を払うと向き合って睨み上げる。

「どうして私がここに居ると分かったの?」

「ご学友の方に聞いたのです。寄宿舎に向かわれた、と」

その言葉に小さく舌打ちする。以前からこの男はティアロを探して学院内をうろうろすることがあった。

ウィシュナの部屋はティアロの第二の我が家のような場所で、そんな安らぎの空間をこんな男に土足で荒らされるのは我慢ならない。だからこそ彼に隠れて慎重に足を運んでいたのに、相変わらず嫌なところで仕事が早い。

「ウィシュナの部屋がよく分かったわね」

学院の敷地内に入るには正門で許可証を受け取らなければならない。それを持っていることで身分は保証されるが、さすがに部屋までは教えてくれないはずだ。

「……ティアロ様のご親友ですから、部屋は知っておりました」

少しの沈黙の後に呟かれた言葉に眉を上げる。

親友だとは認めてないくせに。カチンときたティアロはジースを突き飛ばしてドアを閉めた。たたらを踏んでいるジースに向かって、「私は鍵を返してくるから、馬車で待ってなさい」

「いえ、お嬢様。私が行きます」

「……ティアロ||ミンセットの命令が聞けないっていうの？」

底冷えするような鋭さを持つ声。こんな声が出せたのかと自分でも驚きだったが、ジースも剣呑な気配を感じ取ったようで「了解しました」と去っていった。

第五章 ※注（前書き）

ある意味グロい描写が出てきます、ご注意ください。

第五章 ※注

マチルディアは人々の間を縫うように進んだ。特に目的があるわけではないが、足は淀みなく動いていく。

舌で奥歯をなぞった。あの異物の感触が伝わってくる。指で取っ
てしまえば簡単なのだが、口に手を突っ込む気になれず、数日間ず
っとこのままだ。

今マチルディアが歩いているのは食事街と呼ばれる、ちょっとし
た喫茶店から高級レストランまでさまざまな店舗が軒を連ねている
通りだ。夕食時のせいで賑わっている。店の前を通り過ぎるたびに
良い香りが鼻腔をくすぐるが、そのどれにも魅力を感じなかった。
(良い香りと思えるだけマシかしら……)

苦笑して、薄汚れた横道に入った。すぐに突き当たる。喧騒から
置き去りにされたこの場所は、ゴミ捨て場だ。悪臭が漂う。普通な
らば思わず鼻を覆ってしまうだろうが、マチルディアは思い切り息
を吸い込んだ。

どうしようもない程に、自分の体に吐き気を覚えてしまうくらい
に、気分が安らぐ。

ゆっくり息を吐くと、打ち捨てられた残飯へと無造作に手を伸ば
した。ハエをはじめとする害虫が驚いたようにうごめく。マチルデ
ィアの顔や腕にも止まるが、気にせず漁り続ける――と、「おい、
お前」背中に声がかけられた。

「最近ゴミ漁って回ってるのはお前か」

マチルディアは振り返る。どこかの店の主人か何かだろう。神経
質そうに髭を撫でつけ「困るんだよ、荒らされると」一歩近づいて
くる。

「食いモンが欲しいなら表通りで乞食でもしてろ。ここよりは真っ
当なモンがもらえるだろうよ」

マチルディアは男を無視して、ゴミから腐肉を拾い上げた。すっ

かり変色していて、とてもではないが食べられるような代物ではない。普通ならば。

ハエがたかるその腐肉を、マチルディアは何でもないように口に放り込んだ。慌てたようにハエが飛び回り、逃げ遅れた虫は唾液にまみれて噛み砕かれる。

「うげえっ……お前何を……」

男が口元を押さえる。青褪めた顔。マチルディアは無表情を貫く。
「食べてるのよ。悪い？」

咀嚼もほどほどに、飲み込む。

これが異常だということは理解している。だが忌々しいことに、こうしないと生きていけないのだ。

音のような声で返事をして、ぺっ、と唾を吐き捨てる。唾にまみれたハエが地面に落ちた。舌に残る羽や足などの残骸も適当に指で取り除く。男がますます青い顔をしているが、マチルディアは構わずに次の飯を探し始めた。

「お前っ、ちょっと、待て！ 何考えてやがるんだ！」

男はわずかと近寄ってきて、その肩を乱暴に掴む。

ずるり、と頭に被っていたフードが落ちた。漆黑にも似た髪が揺れる。青白い肌に嵌め込まれた瞳もやはり黒。

マチルディアは先ほどとは違った理由で青ざめて固まる男に向けて、爬虫類のように唇を持ち上げた。獰猛な笑みに男が怯んだ刹那、マチルディアは彼の手を退け体を深く沈めて足を払った。

無様に倒れこんだ男の喉を踏みつけて、言う。

「ここで見たことは他言無用。もし言ったら……分かってるわね？」

足に体重を乗せる。陳腐な脅しでも男には効果があったようで、馬鹿みたいに首を縦に振っていた。ゆっくりと足をどけると、男は小動物のような素早さで逃げ出していった。

「ふう……本当に言わないかしら、あの男」

フードを被り直して独りごちる。男が凝視していた部分――額をそっとなぞる。その感触に、マチルディアは不満そうに唇を尖らせ

た。

「好きでこんな体に生まれたわけじゃないのにね……」

腐った肉片を拾い上げて、乱暴に飲み下した。味覚は狂っているので味は感じないがそれでも、まずい、と呟く。

胸元にぶら下げた黒の十字架が揺れる。――忘れてるわけじゃないわよ。ぼそりと言って独り口を尖らせた。

（まさかあの子がこんなところに居るとはね……）

となれば、彼女の願いを叶えるためにリングムへ行くには相応の覚悟が必要なのだ。十字架を託されたのも何かの縁、と気持ちを片付けて向かうことは出来ない。

マチルディアの額にハエが止まった。それを払うこともせず、マチルディアは歩み去る。

馬車の中で、何とはなしに揺れる景色を眺めていたティアロの視線がひとつの黒影を捉える。

――マチルディア！

あのゴミ捨て場で出会った、奇妙な女性。目深に被ったフードは相変わらず顔を覆い隠していて、けれどティアロには彼女だという確信があった。

「ジース、ちょっと、止めて止めて！」

御者台に居るジースに怒鳴り、返事も待たずに扉を開けた。驚いたジースが慌てて馬車を止めるのと同時に、飛び降りる。あの方向は、学生街か。ティアロはジースの疑問の声も急停止した馬車に目を白黒させている住民も無視して、マチルディアめがけて走り出す。「マチルディア、待って！」

雑踏の中、マチルディアは足を止めた。追いついたティアロは肩で息をしながら、彼女を見上げる。こうして並んでみるとティアロよりも若干背が高い。唯一フードから覗いている口元が動き「何の

用かしら」問いかけてくる。

「え？ あ、用という程のものじゃ……」

反射的に追いかけてきてしまったが、自分はどうしたいのだろうか。特に何も考えてなかった。

「……あ、それ！」

答えに窮しているティアロの目に、マチルディアの胸元に揺れる十字架が飛び込んできた。簡単な装飾が施された、真っ黒の十字架。ウィシュナのものと同じだ。

「もうすっかり絶えた慣習だと思ってたけど、あなたも知ってるの？」

ティアロの驚きをどう受け取ったのか、マチルディアが言った。

「古い慣習？」ティアロが尋ね返すと、マチルディアは頷いて、

「ええ。自身の罪を神に赦してもらうために身につけるものなのよ、これは」

自身の罪。ティアロは舌の上で転がした言葉に、疑問を抱く。――ウィシュナの罪とは？

「お嬢様、一体どうなさったのですか……！」

ジースが血相を変えて走り寄ってくる。彼はティアロとマチルディアを交互に見て、あからさまに眉をひそめた。

「失礼ですが――ティアロ様とはどのような関係で？」

「と、友達よ友達！ セっかくだから夕食に招待しようと思って」

マチルディアが答えるよりも早く、ティアロは口を開いた。訝しがるジースの背中を押して、マチルディアの手を取って、

「ほら、早く帰りましょう。お父様もお母様も心配なさっているわ」

「し、しかし……いくらご友人でもこのような……」

戸惑った声。ティアロは鋭く「このような、何？」問い詰める。

「得体の知れない、気味悪い女？」

くすくす笑いながら言ったのは、マチルディア本人だった。ジースは凶星をさされたのか顔をしかめる。

「良いのよ、私だってあなたの立場だったら断るわ」

「……では、お引取り願えますか」

ジースが素直に要求を突きつけると、マチルディアはあっさり頷いた。慌てて反論したのはティアロだ。

「ダメ！　ちょっとだけで良いの。その……話を、聞かせて頂けない？」

最後は呟くように。マチルディアは考え込むように沈黙する。

「い、いけませんお嬢様！　このような不審者を馬車には乗せられません！」

マチルディアは喚くジースを指して「彼は反対のようだけど？」からかっているような口調。眨されているにもかかわらずくすくすと笑っている。

「馬車を動かさないなら歩いて帰るまでよ。あんたは、馬車で先に帰りなさい。お父様かお母様に私はどうしたのか聞かれたら、こう答えれば良いわ——知らない女と一緒に置き去りにしました、ってね」

言い放つ。ジースは青ざめて口をぱくぱくさせている。

強情なティアロに、最初に折れたのはマチルディアだった。

「そこまで言うのなら、私は行っても構わないけれど？」

どこか面白そうな声音で、ティアロに頷きかけた。

ジースは絶句したままだ。ティアロは焦れて「じゃあ歩いて帰るから。マチルディア、こっちよ」帰ろうとする。

「いえ、それは困ります！」

「なら早く馬車を用意しなさい」

渋っていたが、ティアロが意見を曲げないと悟ったようで、諦め顔で「こちらでお待ち下さい……」と引き返していった。

「強引ね」

マチルディアが苦笑する。

「あいつ、頭固いのよ」

ティアロが吐き捨てる。「全ては主のため、じゃないかしら？」
マチルディアの言葉に首を振り、

「主というより、家名ね。ミンセツ家の名前を守ること頭がいっぱいなよ」

慌しく向かってくる馬車を見つめて、深く息を吐いた。

第六章

「はあ……ようやく落ち着けるわね」

父も母もジースもマチルディアのことをうるさく言ってきたが、彼らの小言をすり抜けてどうにか自室まで案内してきた。客間ではなく自室で話すと告げたときのジースの慌てっぷりは、他に類を見ない。夕食も運ばせると言ったのだが、それはマチルディアに断られた。

「そんな言葉遣いすらもなっていない輩を！ お屋敷まで案内しただけで十分でございましょう！？」

「言葉を選ばないあんたよりは数倍マシよ。前みたいに勝手に部屋に入ってきたら許さないからね」

切り捨てて、彼が詰まった隙に扉を閉めたのだ。今も扉の前をうろうろしている気配がするが、もう無視を決め込む。

以前、自分が居ない間に部屋に入り込んでいたようだったが、今度許可なしに部屋に入ったら父に「あること」全部と少しの「無いこと」を言いつけてやる。

「それで……その十字架のことなんだけど」

そんなティアロの決心は横に置いておき、改めて切り出した。客を迎える用意はないため、毛足の長い絨毯の上に直接座って向かい合う。

「本当に、とても古い慣習よ。リングム地方の更に奥まで行けば、残ってるかもしれないけど」

指で十字架をいじりながら、マチルディアが答える。リングムの奥と言ったら、相当田舎だろう。

ウィシュナの故郷。暖かくなると、彼女の薄紅色の髪と同じ色の花が咲くという、美しい地だ。いつか案内してくれると言っていたが、それももう叶わぬ夢となってしまった。

「自身の罪深さを認め、神に赦しを乞う。罪は何でも良いのよ。他

者がどう言おうと、自分自身がとても許せそうにない……そういうものならね」

ティアロは考える。ウィシュナはいつたい、自分の何が許せなかった？ 分からない。あんなにも近くに居ながら、彼女のことは何一つ分からないのだ。悔しさにスカートの裾を握る。

「つまり、黒の十字は祈りではなく懺悔の象徴なのよ」

「懺悔、の」

反芻した言葉は頭で響きあい、ティアロに問いかける。何に對して、と。

「マチルディアは、自分の何が許せないの？」

しかし口をついて出たのは別の疑問だった。

「私？ つまらないことよ」

自嘲すると、

「生まれてしまった自分、生んでしまった自分、逃げ出した自分。それでも生きてる自分が……とても嫌になる」

独特の声音が、不協和音のような響きを持つ。憎しみが音を発したらこんな感じだろうと、ティアロは何とはなしに考える。

ティアロが言葉を返せずにいると、マチルディアは「今のは忘れて。ただの戯言よ」苦笑した。

「本当言うと、この十字架は私のではないのよ。……学生街で殺された女の子から託されただけ」

昨日の夕食の話でもするような簡単な口調だったので、マチルディアが何と言ったのか一瞬分からなかった。

「――今、なんて？」

学生街で殺された女の子とは、ウィシュナのことではないのか。理解が浸透してくると、今度は余りに意外な言葉に驚いて固まる。フードから少しだけ彼女の瞳が覗いた。闇のような光を湛えた、試すような、探るような視線。

「そ、その女の子……ウィシュナは、私の友達よ。どうして、あなたか」

見た目は非常に怪しいが、人殺しをするような人物には見えない。「死の間際——もう助からない状態だったわ——たまたま通っただけ。この街に居る間、私はあそこで暮らしてたから」

あのゴミ捨て場のことだ。そこで暮らしているというのにも驚きを隠せないが、この言葉が真実であるのなら、マチルディアが唯一ウィッシュナをみとった人物だということになる。

「あの、ウィッシュナの遺体は」

「私もあなたに聞きたいことがあるわ」

質問はかわされ、マチルディアはローブの袖から小さな袋を取り出した。中から出てきたのはゴミのようなくつもの紙切れ。それらを丁寧に並べて、ティアロはそこに現れた文字列を凝視したまま凍りついた。虫食いの文章だが、それでも「ウィッシュナ」「夜」「学生街」「会おう」などの単語は拾い上げられた。そして、何よりもティアロを驚かせたのは——

「『ティアロより』……あなたの名前ね。字はあなたのもの?」

震える指で字面をなぞっていく。その動きに合わせて紙がずれる。ティアロ達を真実から遠ざけているかのようだ。

「これは何なの……?」

「あのゴミ捨て場で拾い集めたものよ。私の住処をうるさく荒らし回る警備隊には知らせなかったけれど」

乾いた血がついてる。ウィッシュナが殺されたとき、これを持っていたということか。ウィッシュナはティアロに会うために……この手紙の内容を信じて、夜の学生街へと繰り出していったのだろう。「後でね」はこの手紙のことを指していたのか。

「これは間違いなく私の字だけど。こんな手紙、知らない。書いてない」

喉が痛い。唇が震える。言葉が上手く出てこなかった。涙を堪えて無理やり言葉を紡ごうとしているときのような不自由感が体を支配する。

——ウィッシュナを殺したのはこの手紙の人物だ。誰が? 学院の

人間？ まさか。ウイシュナを殺して得する人物なんて居ない。地方領主の娘などに興味はないはず……いえ、待って。浮かんできたのは学友たちの姿。ウイシュナが居なくなれば、ティアロの隣が空く。それを狙って？ ありえない話ではないが――

それでも一つだけはつきりしていることがある。

「私がウイシュナを殺したも同然じゃない！」
拳を握って床を叩く。

紙片があざ笑うように舞った。

マチルディアがこの紙切れを警備隊に提出しなかったのは幸いと言えるだろう。

簡単な取調べが一転、犯人確定だ。ミンセット家の力があれば、事件を闇に葬ることは出来るかもしれないが……というより、確実にそうなる。そして調査はそこで終了するだろう。ティアロ＝ミンセットが殺したのだと、関係者の記憶に刻みつけられたまま。

――私じゃない！ いくら叫んでも、どれだけ訴えても、彼らにとっての真実が偽りに成ることはない。

マチルディアはあまり深入りしない方がいいと言って去っていったが、ティアロはもう何がなんでも犯人を見つけたつもりでいた。

とりあえずは学友を調べてみるが……ある意味では生徒全員が容疑者になる。あまりの多さに眩暈を感じながらも、考える。怪しいのは、真っ先に近づくようとしてきたファーンか。

レイスト家。ジースが言うようにそこそこ大きな家だ。特に最近の勢いが良い。だがミンセット家には及ばない。ミンセット家は南の広大な領地を預かり、その税収入は相当な額だ。過去に数度、国王の後宮に娘を送ったこともあり、王家との繋がりもそれなりにある。

「とりあえず、あと九日か……」

ティアア口は静かに息を吐いた。

第七章

「ジース、あんた何してるの？」

話が終わると早々に帰宅していったマチルディアを外まで送り、帰ってきた途端、せわしなく駆け回るジースの姿が視界に入った。こうしているところちらちらと鬱陶しく飛び回る小蠅のようだ。

大量の掃除道具を持ち出して廊下を走り回っている世話役は、疑問顔のティアロに「掃除ですよ、ティアロ様」と見れば分かることを口にした。こちらの意図を理解する努力くらいしてほしい。

「なんでいきなり掃除なんかしてるのかって聞いているのよ。ほかの侍女まで巻き込んで」

「そんなの決まってるじゃないですか」

何故そんなことを聞くのか理解できない、とでも言いたげな態度だ。

「あんな不気味で不潔な女が歩いた後ですよ？ お屋敷の汚れを落

とさないでどうするんですか。ティアロ様、そこはまだ汚いままなのであまり歩かないでください。ああ、お部屋も消毒しますからね」

——いったんお前の頭の中も消毒した方がいい。

のと元まで出かかった言葉を深呼吸と共に吸い込んで、大げさに息を吐き出した。以前、ウィシュナに対する暴言（ジース本人はそう思っていないだろうが）をティアロに怒られたというのに、今度はマチルディアを貶すこの神経と思考回路が、もはや別種の生物のよう感じられる。

この男の世界で唯一価値のあるものは、「血筋」あるいは「家柄」しかないのだろうか。

「ティアロ様、お分かりに」「あんた、本当にいい加減にしなさいよ」

ジースの言葉尻に怒りの声をかぶせる。

「マチルディアは私の友人と言ったはずよ。それを何？ それ以上

言うようだったら許さないわよ」

ティアロが言うと、今度はジースが息を吐いた。「いいですか、ティアロ様」聞き分けのない妹を宥めるような、そんな声で反論する。

「ティアロ様は、ミンセット家のご息女でございますよ。生まれながらにあらゆるものを持ち、また、手に入れられる可能性があるのです。」

それを何故、あんな下々の者たちと付き合って、ご自分の価値を落とすような振る舞いをするのですか？ もっとご自分の『価値』を大事になさってください」

「私の『価値』ですって？」

眉を跳ね上げる。

「そんなものは、私が決めるわ」

ティアロの行く手を阻むように向かい合うジースを押しつけて、部屋への道を辿る。侍女たちはどうして良いのか分からないといった風に、ただおろおろして二人を交互に見比べていた。

「残念ながら、人の価値というのは他人が決めるものです」

静かなジースの声が背中にかかるが、ティアロを振り向かせるだけの力はなかった。

人生で最も長い九日を過ごし、レイスト家の華やかな夜会を訪れた。力を誇示するかのような煌びやかさ。手入れの行き届いた庭園の一角はこれでもかと飾り立てられ、来訪者を驚かせていた。財力を見せつけるには金を持っているだけでは足りない。それを使って常に着飾ることが他者への威圧となるのだ。

ティアロは憂鬱な息を吐いた。

寂れた裏路地とは正反対の空気。ティアロの住む世界はもちろんここだが、どこか居心地が悪かった。

着飾った貴族たち。最近力をつけてきたレイスト家へ探りでも入りに来たのか、かなりの数に上っていた。両親は既に他の貴族達とどこかへ消えていったようだ。

彼らはティアロに気づくと極上の愛想笑いを浮かべて近づいてくる。精一杯「ティアロ〓ミンセット」らしく返すが、ファアーノが気になってずっと落ち着かない。学友も何人か来ているようだ。共犯か？ と疑っていけばキリがなかった。

「くれぐれも、ファアーノ様と良いご関係をお築きくださいね」というジースの期待には応えてやれそうにない。応える気もないが。

「ティアロさん、せっかく来ていただいたのにご挨拶が遅れてごめんなさいね」

ワイン片手に立ち尽くしていると、ようやくファアーノが姿を見せた。優雅な深紅のドレスに身と野心を包んだクラスメイトは、満面の笑みを浮かべている。その容姿と相まって見る者の心を開かせるような笑顔だが、ティアロにはむしろ逆効果とさえいええた。

「どうです？ 楽しんで頂けてますか？」

「……そうね。想像以上に豪華でビックリしてるわ」

惜しげもなく注がれたグラスワイン。遙か遠くロウレート地方の最高級品だ。少しだけ、口にする。本来ならば少し甘いはずの後味は、ティアロの気持ちを代弁するかのように苦味を舌や喉に染み込ませていった。

「レイストのパーティなんて、もっと質素かと思った」

唇を舐めてから素っ気なく付け加えた。驚いているのは本当のところだが、まだまだミンセット家とは釣り合わない。ティアロ〓ミンセットはファアーノ〓レイストよりも上に立っている。そのことははっきりさせてやらねばならない。

しかし——当然というべきか——この言葉がファアーノの気に思いつき障ったらしく、

「……ミンセットのお嬢様に楽しんで頂けてるのでしたら何よりですわ」

口調は丁寧だが額には青筋が浮かんでいる。顔が赤いのは紅とアルコールのせいだけではないだろう。内心、舌打ちのひとつや二つしていそうだ。

「楽しい時間をプレゼント出来るよう頑張った甲斐もありましてよ」
親に何か言われているのか、ファアーノは一向に立ち去ろうとしない。いくら取り入ろうとしても、ティアアの隣は絶対に空かないのに。

ファアーノの言葉に耳を傾ける素振りを見せつつも、頭の中はウィシュナの手紙のことではいっぱいだった。

他人の字を真似ることはそれほど難しくはないだろう。クラスメイトなのだから、ティアアの字を盗み見る機会はいくらでもある。それほど特徴のあるクセも持っていない。そんなに長い手紙ではなかったし、雰囲気だけ似せれば誰も気づかないだろう。

問題は、そうしてウィシュナを呼び出して、殺して……遺体をどこに持ち去ったのか。警備隊が街中探したのだ。それでも見つからないのだから、もうここにはない可能性が高い。

「……そうしたら、お父様ったら酷いんですの。こともあろうに……」

ファアーノの言葉が思考を遮る。こんなにも他人の声が邪魔だと思ったのは、ジースの小言以外では初めてだ。

「ちよっと黙っててもらえる？ 考えごとがあるの」

一瞥したファアーノの顔は今度こそ怒りに染まり、肩を震わせていた。ぎゅっとドレスの裾を握りしめ、唇を噛んでいる。

「そ、そうですか……お邪魔して申し訳ありませんね、ごめんあそばせ！」

ふんっ、と乱暴に裾を翻して去っていく。ファアーノはこれで、第二のウィシュナにはなれないということを悟ったのだろうか。

「はあ……」

ティアアはウィングラスをテーブルに置き、ため息をつく。

ミンセツト家のティアアではない。

自分はティアロ―ミンセットだ。

ウィシュナだけがそう扱ってくれた。ウィシュナの声が聞きたい。彼女の親しみが恋しくて懐かしくて、涙が出てきそうだった。

「待っていてウィシュナ。絶対に犯人を見つけるから……！」

ティアロは動き出す。ファ―ノを監視してみよう。今ティアロに出来ることは、可能性をひとつひとつ確かめて、潰していくことだけだ。

ファ―ノはすぐに見つかった。会場から離れたところで数人の学友たちと集まっているのが見えた。皆、学校でいつも一緒にいる面子だ。最近力をつけてきたレイスト家に取り入ろうとする中小貴族の娘たち。ティアロはあまり面識はないが顔と名前が一致するくらいには知っていた。

彼女たちは何か話しているようだ。ファ―ノは顔を真つ赤にして――涙を流している。ティアロは整えられた植え込みの影に隠れて聞き耳を立てた。

パーティの賑やかな声もここではくぐもった雑音にしか聞こえない。彼らの会話は難なく盗み聞けた。こんな自分を見たら、ジースは「ミンセットの娘がはしたない」と騒ぐに違いない。

「ファ―ノさん、悔しいのは分かるけど落ち着いて……」

「落ち着いてなんていられないわ！ 何ですか、あの言い方と態度は……！」

ギリギリと奥歯を噛んでいそうな形相だ。宥めている学友に、今にも掴み掛っていきそうな気配を漂わせている。

いったい何の話だ、と思った矢先にファ―ノの口から答えが飛び出た。

「ミンセットの娘だからっていい気になりすぎですわ！」

――私の話か。ティアロは無意識に息を潜める。さっきのやり取りの話をしているんだろう。

「余り大きな声では……」

「あの人を見下した顔……なによ、お高くとまっちゃって！」

慌てて周囲を窺う学友の声は、やはり届いていない。

「ミンセツの名がなければ、あんな女……誰が相手にするものですか！」

ティアロは刹那、硬直する。

——そうだ、ティアロに近づく者は皆ミンセツとの繋がりが欲しかっただけ。それは分かっている。「ティアロ」を求めている人は居ないということは、幼い頃から理解していた。漠然とした、ふわふわと漂う不確かな意識ではあったが——。

(ウィシュナ……！)

どうしてこうも、胸がざわつくのか。

ティアロはその場から去る。ドレスについた葉を払い落として、深呼吸をひとつ。

パーティ会場はまだ盛り上がりを見せている。「ミンセツ家のお嬢様」に近づこうとする人々を視線で跳ね除けて、馬車へ向かった。

「お嬢様！ まだ会は終わって……」

ジースが案の定抗議をしてきたが、その声は途中で止まる。

「随分と顔色が……どうかなさいましたか？」

「帰る」

簡潔に言い放って返事も待たずに馬車へ乗り込む。気分も悪いが、機嫌もその何倍も悪い。ジースは肩をすくめると、近くに居た使用人に何か言伝を頼んでいた。両親への伝言だろう。

御者台に座ったジースが馬に鞭を入れた。嘶きが聞こえ、ゆっくりと馬車が進みだす。

小刻みな振動に身を任せながら思考に沈み、けれど先ほどのファノの言葉が頭に反響して集中できない。

『誰が相手にするものですか！』

——うるさい、家名につられただけの輩なんて私から願い下げだ。乱暴に頭をかく。そうだ、そんな連中はこちらからお断りなのだ。しかし、ウィシュナがいなくなった今——ただのティアロを慕って

くれる人間がどこに居る？

ああ、とティアロは息を吐く。おそらく――誰も居ない。その事実というよりも、そう結論付けてそれに言い返せない自分に愕然とした。

――マチルディアはどうだろうか？ ミンセットと知っても態度を変えない彼女なら、自分を「ティアロ」として見てくれてるかもしれない。たとえば、あんなごみ捨て場じゃなくて良い暮らしをさせてあげればもっとティアロと仲良くしてくれるかも……

(……それじゃダメじゃないの。私もどうかしてるわ)

軽く首を振ってその考えを追いつ出した。

「お嬢様、先日屋敷に招いたマチルディアのことですが」

「――なによ？」

タイミングを見計らったかのようにジースが口を開いた。視線はまっすぐ前を見つめたまま。

「また私の友人にケチをつける気なの？」

「ティアロ様のご学友の殺害現場に居るのですよ。怪しいとは思いませんが……」

「そんなことは」

ない、と果たして言い切れるだろうか。言いかけた言葉を止めて腕を組む。ウィシュナの最期をみとったのはマチルディアで間違いはなさそうだが、ゴミ捨て場に住んでいるのであれば遺体がどこへ行ったのか知っていてもおかしくはない。それを教えてくれないというのは……そういえば前回質問したときはぐらかされなかったか。これはもう一度会って確認すべきだろう。

「いけませんよ、ティアロ様。警備隊に任せておけばいいのです」
見透かすように釘を刺された。もちろん――従う気はない。

第八章

マチルディアは目を覚まして一番に、大きく伸びをした。その拍子に、背を預けていたゴミ山の一角がぱらと崩れ落ちる。朝から元氣なハエたちがうるさく飛び回って、落ちていったゴミに群がっている。

首をぐるりと回して、睡眠中の凝りをほぐす。

——嫌な夢を見たわ、まったく。

今朝起きるまで夢は続いていたが、本当に最悪だった。楽しさのカケラもない。

十分に凝りをほぐしたあとは、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。ともすれば高ぶってしまいそうな感情を静めるために。

奥歯を舌でなぞりながら、ゴミに預けた背を離す。首からぶら下げた漆黒の十字架が揺れた。

マチルディアがもつとも毛嫌いしている、昔の夢だった。——幼い少女が泣き喚いている。地べたに座り込み、救いを求めるかのように手を虚空へ伸ばしながら、ただ意味のない言葉を発し続ける。少女はまだ分かっている、自分たちを救ってくれる存在などこの世に居ないということ。

自分たちは生れ落ちたその瞬間から——見捨てられている。自身でさえ愛せない存在を、いったい誰が愛し、手を差し伸べてくれるというのだろうか。

夢の中で泣き続ける、幼い少女の幻影がちらつく。遠い日の残響がまざまざと思い出されて、顔をしかめた。

どうして今になってこんな夢を見たのか。黒の十字架なんて受け取ったせいかな、それとも、あのティアロという少女のせいだろうか。あの少女と自分は似ている、とマチルディアは思う。生い立ちや姿形はまったくと言っていいほど接点などないが——自分は孤独だと強く思い込んでいるところが、特に。生まれながらにして備わっ

ている「血筋」や「家柄」を否定し、ただ「自分」であることを主張する――若い頃の自分に、そっくりだ。

マチルディアはのそりと立ち上がる。

新しいゴミ山ができている。昨日のうちに捨てられたものだろう。見れば程よく腐敗した食物が鼻の曲がるような悪臭を放ってマチルディアを呼んでいる。ふらふらと近寄って、そのひとつを口に運んだ。こんな場面をミンセットのお嬢様が見たら青ざめるに違いない。そしてジースとかいう世話役らしき男は、血相を変えてマチルディアを罵るだろう。あまりに有り得そうな光景に、思わず苦笑をもらった。

彼女は一日中ここに居るわけではない。日中のほとんどは街の裏路地を転々とし、残飯を漁る。その間にここに捨てられていくゴミたちを、朝食として頂くのだ。

いくら誰もが黙認するゴミ捨て場と言えど、マチルディアのような怪しい人物が居たのでは誰も近寄らないだろうと考えてのことだった。実際、うとうと眠りかけているときに誰かが来たことがあるが、マチルディアの姿を認めるや否や踵を返して逃げ去っていったことがある。貴重な食料を逃した――かどうかは分からないが、それもあって最近では特に出歩く時間を多く取っている。

「さて……行こうかしらね」

朝食もそこそこに、フードを改めてかぶり直す。

今日のように風のない日は好きだった。少し長めに歩いてもいいかもしれない。まだ低い位置にある太陽を見つめて、目を細める。あの美しい太陽を創造した誰かは、何故自分たちをこうも醜く創ったのか。

などと、らしくない卑屈めいた思いをめぐらしていると、うるさくこちらに近づいてくる足音が耳に届いた。

いつもと、何かが違う。ティアロは学園へ来てからずっと違和感を覚えていた。しかし見た目にはいつもと変わらない「平和」な学園だ。授業もつつがなく始まり、いつも通りの退屈な内容。

フアーノⅡレイストに招待されたあの夜会から、二日経った。

会の翌日は休日だったため、ティアロはさっそくマチルディアの住処へと赴いたのだが……残念ながら彼女は留守だった。代わりに警備隊の姿が目についた。なるほどこうも警備隊にうろつかれては、マチルディアもゴミ捨て場には居づらいのかもしれない。警備隊も最近はずっかり近寄らなくなっていたゴミ捨て場だが、初心に帰るということなのだろうか。犯人は現場に戻るという有名な言葉もあることだし、と心の中で呟いた。

「ご機嫌よう、何か進展はございましたか？」

近くを歩いていた警備隊員に声を掛けてみた。振り返った男は鬱陶しげな表情をしていたが、ティアロが提示した学生手帳を見た途端に姿勢をただし、敬礼をする。

「み、ミンセット家の……あ、その、進展は何も」

警備隊というのは民間の組織だ。普通、ティアロのような大貴族と話をすることもないし、そもそも接点など持つことは一生ない。事件が発生した当初にティアロが事情を話して聞かせたのは特殊な事態であり、ジースに言わせればそっちの方が「事件」らしい。

「そう。何かあれば必ずミンセットにも連絡を入れてちょうだい。もちろん私——ティアロ宛てよ」

「は、はい。かしこまりました」

恐縮しきった様子の警備隊員を残し、ティアロはゴミ捨て場を去った。これ以上居ても仕方ない。

風が吹き、悪臭を運んでくる。咄嗟に鼻を覆った。

やはりこの臭いには慣れない。体に臭いが染み付いてしまいそうで、無意識に早歩きになる。

——そのまま昨日は会えずじまいで、今日は朝から授業。昨日の警備隊のことも気になる、学校が終わったらすぐにでも会いに行く

つもりだった。

以前屋敷に招いたとき、マチルディアはこの街の住人ではないと言っていた。もし彼女が街を出てしまえばティアロに追う手段はなく、手がかりも途絶えてしまう。

（ああ、だめよ、落ち着かなきゃ……）

机の上でぎゅっと手を握った。

そわそわと落ち着かない理由はマチルディアのことだけが原因ではない。

あるのかないのか分からないような、ふわふわと漂う違和感。その微妙な空気が肌を撫でるたびに、居心地の悪さを感じる。これは視線、だろうか。

ちら、とファアーノ・レイストの背中を盗み見る。後ろから見る限りは普段と変わらない様子で授業を聞いているようだった。教師の言葉を静かに聞いている。先日の激情がうそのようだ。

自分も少しは落ち着かなくては。

（たとえば学園の誰かが犯人だとして……筆跡を真似るには私のノートを写すのが一番早いわ）

チョークと鉛筆の音に満たされた教室。

ファアーノの背中と黒板を交互に見つつ、思考をめぐらす。

ティアロが教室を離れている間にノートを盗み見て書き写す——出来ないわけではない。しかし、自意識過剰でもなんでもなく「ティアロ・ミンセット」のことは皆が見ている。誰かがミンセットの持ち物に触れる、たったそれだけのことで噂の種になったりするのだ。今日とて、ティアロが自席に着くまでの間に噂話を十個は耳にした。誰それが付き合い始めたのだ、何家が民衆に反感を持たれているのだ、大半はティアロにとってどうでもいい話題だ。

（んー……教師？）

黒板に向かっていている教師を見つめる。教師の中には、生徒がきちんと授業を受けているかチェックするために定期的にノートを回収する者もいる。それなら自然かつ噂にもならず、ティアロの筆跡を

写すことができる。

だが、ウィシュナが亡くなってから近づいてきた教師など別にいない。

教師は国が厳選した人材で、（建前上は）そういった野心等は一切持たない者ばかりであるし、仮に狙いがあるってウィシュナを殺したとしても、決してティアロに取り入ることはできない。特定の生徒と親密になることは禁止されているからである。それは男女間の関係だけに留まらない。学園側にばれたら即刻解雇、今後一切教師としての職——家庭教師も含めて——には就けなくなる。

教師にとってはリスクの方が高いと言える。生徒の誰かに秘密裏に頼まれたとも考えられなくはないが——そうするとやはり怪しいのはファーノだろうか。

（はは……私はどうしても彼女を犯人にしたいのかしら）

思わず苦笑を漏らした。思考は堂々巡りだ。

ちょうど授業の終わりを告げる鐘が鳴った。教師のお決まりの台詞「では、今日はここまで」を待たず生徒たちは机の上を片付け始める。ノートを取り上げた拍子に「あっ……」筆記具が落ちてしまった。乾いた音を立てて床とぶつかり、ころころと転がっていく。筆記具の行き先を視線で追っていると、それを取り上げる手があった。

「落ちましてよ、ティアロさん」

「……ファーノ」

視線を持ち上げると、豊かな金髪を背中に垂らしたクラスメイトが満面の笑みで筆記具を差し出している。「レイストのやつ……」という囁き声がどこから聞こえてきた。

筆記具を受け取り「どうもありがとう」形だけの礼を述べる。ついこの間「誰があんな女と！」と泣き喚いていたのがうそのような表情だ。きつと腹の底では苦々しく舌でも出しているのかもしれない。

さっと片付けて、立ち上がる。次の授業は別教室へ移動だ。ファ

ーノを置いてさっさと教室を出る。と、当然と言わんばかりに彼女もついて歩き出し、肩を並べる。同じクラスなのだから当然次の授業も一緒だ。ティアロは顔をしかめた。

「ところで――私、少々気になることがございますの」

しかしそんなティアロの様子などお構いなしに、ファーノはどことなく上機嫌に切り出した。

「何よ？」

対するティアロは素っ気無い。

「最近、ウィシュナⅡディーニが殺された場所へ足を運んでらっしゃいますわね？」

す、と顔と近づけてくる。

「――そうね」

少し迷ったが、頷く。何が言いたい？

「ご存知？ あの汚らしい場所に棲んでいる女を」

「ええ、居るわね。それが何？」

「ティアロさん、こうはお考えにならないのかしら、と思って」

妙にもったいつけたように笑うファーノに若干苛立ちながら「だから、何よ？」先を促す。

「ウィシュナⅡディーニを殺したのはあの女だ、って。普通はそう思いませんか？ あんな場所に棲んでいるなんて、まともじゃありませんわ」

「それは」

咄嗟に反論しかけて、止まる。考えたことがないわけでは、なかった。だが、彼女には理由がない。ウィシュナとマチルディアの間にはなにひとつ、接点がない。

言い聞かせるように内心で繰り返し、

「……それは、あなたの偏見よ」

ファーノに答えた。早く次の教室に着いてくれないか。会話が億劫だ。

「庇いますわね。……お屋敷にもご招待なさったようですし、仲が

宜しいですね。ティアロさんともあろう人が、あのような浮浪者とどのような関係かしら」

「妙に突っかかるわね、あなた本当に、何が言いたいわけ？」

「いえ、ただ——」

唇の端を持ち上げる。

「次は誰を殺すのか、相談していらっしゃるのかと思ひまして。あの汚らわしい女と」

「……はあ？」

突然何を言い出すのだ、この女は。素っ頓狂な声を上げたティアロを廊下に行く生徒たちが振り返ったが、すぐに視線を戻していった。

「あら、違いますの？ 正体不明の人間を使って、邪魔な方を——不要になった方を始末していらっしゃるのかと思ひましたわ」

「私がウィシュナを殺したと、言いたいの？」

それが当たらずとも遠からずという事実があるだけに、なんとも反論しづらいが、断じてウィシュナを邪魔に思ったことなどない。まったくの見当違いな見解に怒るタイミングも逸してしまった。

「あら、怖い顔なされないで。私も気をつけないと消されてしまいますわ」

わざとらしく両手で顔をはさんで、首を振る。

こいつ——額に青筋が浮かんだ気がする。ファーノはもう、ミンセツトとレイストという「役割」を捨てたのだ。貴族としては失格だが、彼女の性格を考えればそれは至極当然と言えた。プライドが高く、自尊心を傷つけられるのを嫌う。思わず、うらやましく思った。そうも簡単に「貴族」という服を脱いってしまったファーノに対して。

ここでやっと次の教室に到着した。

ティアロは教室を見回して——今日付き纏っていた違和感の尻尾を掴んだ気がした。

クラスメイトたちの視線が、どこか遠巻きなのだ。ファーノを見

ると、素知らぬ顔で席につく。――こいつ、言いふらして回ったわね。信じる方も信じる方だわ。

ティアロは唇をかねで、自分の席についた。

第九章

「ティアロ様、いかがなさいました？　ずいぶんとお怒りのようですよ」

「怒ってないわよ。いちいちうるさいわね」

にらみつけると、ジースはそれ以上何も言わなかった。ただ肩をすくめるだけで、その「やれやれ」とでも言いたげな仕草が、カチンと来る。

「何よその態度は。文句があるなら言いなさいよ」

完全な八つ当たりなのは分かっているのだが、つい語調を強めて詰ってしまう。それでもジースは何も言わなかった。ティアロは鼻を鳴らすと馬車に乗り込む。

マチルディアの元へ行こうと——そして、あの空気から逃れよう——授業が終わったと同時に教室を飛び出してきたのだが、門で待ち構えていたジースにあっさりと捕まった。普段だったら彼などお構いなしなのだが——ファアノのこともあり、あまり騒いで注目を集めることはしたくなかった。だから大人しく馬車に乗ったのだが、やはり邪魔された感が否めない。

帰ると決めたのは確かに自分だ。しかし嫌いな人間が何をやってダメなように、ジースがどう動いても何を言っても気に障ってしまうのだろう。

馬車の振動に身を任せながらティアロは窓の外を見る。無意識のうちに、視線はあの黒いローブを探して彷徨う。けれどそう簡単に出会えるはずもない。特に目に留まるものもなく景色は流れていく。人々の喧騒も木々のざわめきも、皆ひとつにまとまってぐるぐるとティアロの周囲を渦巻いているようだった。すべてが妙に遠く、現実感に乏しい。

『残念ながら、人の価値というのは他人が決めるものです』

不意に、ジースの言葉がよみがえる。

自分の価値を決めるのは他人。ティアロはその言葉の片鱗を垣間見た気がした。

たとえば、ティアロはミンセットではない——そう喚く者がひとりだとしたら、単なる世迷いごとでしかない。しかし、それが何百人、何千人と居たら？ もしくは、ティアロの両親が「お前はミンセットではない」と言い出したら？ ティアロがいくら「ティアロ＝ミンセット」であることを主張したところで、彼らが認めなければそれは虚しい自己主張でしかないのではないか。

そこまで考えたとき、ふっと肌が粟立ち、腹にキリキリとした痛みが走る。緊張や感情の昂ぶりが腹痛を起こすことはよくあった。その痛みに意識が急速に現実へ引き戻され、周囲の音も色も鮮やかに認識できるようになった。

ティアロは眉を寄せる。

今、自分が考えていた諸々の仮定——それらが、何か重要なひらめきを運んできそうだったというのに、全てがあつという間に現実の景色に溶け込んでいってしまった。酷くもどかしい。

「ジース」

御者台に座る背中に声を掛ける。馬車の音に紛れて「何でございましょう？」返事はすぐに聞こえてきた。

ジース＝ナシヤス。ティアロの世話役などという立場にありながら、ただの平民出の青年だ。よくよく考えてみれば不自然なことだった。ミンセットほどの大貴族ともなれば、世話役も当然貴族であるのが普通だ。

彼の過去を、ティアロは知らない。興味を持ったことすらなかった。口うるさくて融通の利かない世話役だと、漠然と邪魔に思っていただけだ。ジースは、周囲からどのように品定めされ、価値を決められて今の立場に居るのだろうか。そういえば、両親は妙にジースの肩を持つ言動をする。少なくとも二人はジースを認めていると

いうことだろう。

（小説でよくある使用人と主の恋、とか……いやいや、それじゃお父様が許すはずないものね……うーん）

滅多に本は読まないが、恋愛を主題に置いた物語は好きだった。ウィシユナとも何度か図書館へ足を運んで互いのおすすを紹介しあったことがある。今となつては「よき思い出」となつてしまった日常のページだ。

「ティアロ様、いかがなされましたか？　どこか体の具合でも？」心配そうな声に我に返る。少し考え込んでしまったようだ。呼んでから不自然に間を空けてしまった。

「そうじゃないわ。ただ、あんたが昔何やってたのかなって思つて」「私が、でございますか？」

まさかそう来るとは思つてなかったのだろう。心底驚いたように声を上げた。

「あんたつて平民出よね？　どういう経緯でミンセツに雇われたわけ？」

「ティアロ様にお聞かせするような話は何もございませんよ。ただご両親が望まれ、私自身もそうしたいと思つたのです」

ジースの返答に、腕を組んで首をひねる。そもそも「両親が望んだ」ということがおかしい。平民と貴族。普通ならば接点など皆無だ。彼はティアロが物心ついた頃にはすでに、傍らに居た。最低でも十年以上はミンセツに仕えている計算になる。幼い頃はこの美形の世話役を「お兄様」などと呼んでくっついていたが……おぼろげに昔を思い出して、ぶる、と肩を震わす。今では口が裂けてもそうは呼べない。

「だから、どうやって私の両親と知り合つたのよ。普通有り得ないでしょ、そんなこと」

「有り得てしまったのですから、仕方ありません」

手綱を操りながら深々と――ため息をついた。質問を繰り返すティアロに疲れたのかと思つたが、それ以上に何かを嘆くようなト―

ンが含まれているように感じられた。

「私も詳しい経緯は分かりかねるのです。物心ついた頃には、既に旦那様や奥様と面識がございましたので」

「ふうん……そう」

それ以上尋ねることもせず、馬車の外を流れる景色に視線を戻した。

ジース自身がどうこうと言うよりも、彼の両親とミンセットが繋がっていたと考える方が、確かに違和感はない。

彼の過去が気になるのではなく、ティアロの興味は「ジースⅡナシヤス」という平民の青年がどのような価値を与えられて今ここに居るのかという一点に注がれている。

とにかく、この話は両親に聞いた方が早そうだ。

視界に入ってきた屋敷を見上げながら、小さく頷いた。

マチルディアはスラム街の細い裏道を縫うように進んでいた。よどんだ空気が、マチルディアの動きに合わせて鈍く動く。まばらに人は居るようだが、あまり生気を感じられない瞳を虚空に向けてぼうつとしているだけだった。マチルディアのことを気に留める余裕のある者などここにはいない。

遮蔽物の作る影に身を溶け込ませながら、じつと耳を澄ます。

彼女を探して回る足音はもう遠いようだ。

「ふふ、必死ねえ——」

追われる身でありながら、その口元は笑みの形に緩んでいる。それはかくれんぼを楽しむ子どものようでもあった。離れた場所から「居たか?」「見つかりません」などのやり取りが聞こえる。検討違いの場所を探す鬼たちの姿を想像すると、笑みはいっそう深くなった。

マチルディアは追われることに慣れていた。それは今のような捜

索・追跡であったり、あるいは生まれ故郷を追われたときのような迫害であったりと様々だ。

「まあ、面倒なことになる前に逃げて正解ね」

今朝がた、自分の棲み家にやって来た自警団の連中——足音が近づいてきた段階で、反射的に身を隠したのだ。長年の経験から出た衝動的な行動であったが、それが功を奏したようだ。ゴミ捨て場に行って来た彼らは、明らかにマチルディアを探していた。もっとも——そのような条件反射が身についてしまった今までの生活に苦笑を禁じえないが。

しかし、なぜ今になって自警団が自分を探しているのか、という疑問があった。ただ、想像はつく。

大方、「事件現場に寝泊りしている怪しい女が居る」とでも通報されたのだろう。マチルディアも特に隠れていたわけではないので、そういった事態になるのも時間の問題だと認識はしていた。

もちろん自分は殺人犯などではないが、捜査に非協力的なのはメッセージ紙片の件でも明らかであるし、何よりも見方によっては殺人鬼よりも忌み嫌われる存在だ。捕まるわけにはいかない。たたかれれば、出た埃で咳き込む者も出てくるかもしれない。

「この街もそろそろ潮時か」

事件が起こった直後に逃げなかったのは、ウィシユナに対して多少の後ろめたさがあったかもしれない。しかしそれももう終わりだ。ティアロには悪いが、何らかの火の粉が降りかかって来る前に出た方がいい。残念ながらこの事件は——ある一点において——永久に迷宮入りだろう。

随分と遠くなっていった足音におぎなひな気を配りながら、マチルディアはさて、と視線をめぐらした。

誰も彼女が追われているなどと思わないような軽さで、呟く。

「昼食にしようかしらね」

ぐう、とのんきな音を上げる腹をさすった。

第十章

物事の良し悪しというのは――人々の価値観というのは、常に「時代」という大きな枠組みの中で形成される、非常に移ろいやすいものである。

神々が大地を直接に支配していた時代であれば、ミンセット家など取るに足らぬ血筋であったかもしれない。人殺しが美德であった時代であれば、もしかしたらウィシュナを殺した犯人は英雄として称えられたかもしれない。

そうした事柄は、誰かが特定の人物に、その時代の価値観によって育まれた規則規律を「適用」させた結果に過ぎないのだ。

「珍しいな、お前が私の部屋に来るなど」

「ええ、ちよつと」

帰宅したティアロは、善は急げとばかりに父の自室へと赴いた。本棚と執務机しかないが、どことなく重厚な空気が漂う部屋だ。肺を圧迫されるようなこの威圧感が、ティアロは昔から苦手だった。

父は珍しく娘が自室へやって来たことに驚いていた様子だったが、「どうした？ 顔色が少し悪いようだが」

怪訝そうな父に慌てて首を振る。まさか学院でのことを言うわけにもいかない。父に余計な心配と、干渉の余地を与えてはならない。「そんなことありませんわ。そんなことより、ジースについてお話したくて」

「ジースだと？」

話を切り出すと途端に渋い顔を作る。「何をいまさらそんなことを」とでも言いたげな表情だ。

こちらの意図をはかりかねているのかもしれない、と考えたティアロは、

「ええ。どうしてわざわざ平民を雇ったのかと思ひまして」

何でもないように装って、続きを促した。幼い頃からこの身に染み付いた「愛想笑い」は誰にも負けない自信がある。

「優秀なら雇う。それだけだ」

父の言葉に「優秀？」眉を跳ね上げる。

「けれどお父様。彼はここに来る以前、別の貴族に雇われていたというわけでもないと聞いてますわ。私の世話役としてはいささか経歴が不足しているようにも思いますけど……そんな彼をどうやって見つけたというんです？ 経歴も実績もない彼を優秀と言うのは、どうということなのでしょう」

「それは……」

珍しく言いよどむ父に、妙な胸騒ぎを覚えた。ティアロが聞いたのはただ一点、「ジースに認められた価値」である。最初に投げた質問はそれ以上を問うものではない。ティアロにとっては非常に興味のある話題だが、父にしてみれば採用条件を娘に教えるだけの単なる世間話か思い出話の類だと軽く考えていたのだが――。

父は机の上にひじを置き、組んだ指の上にあごを乗せてまぶたを閉じている。頭の中で物事を整理しているときに見せる、父のクセだ。ちなみに、立っているときは手であごに触れる。

それはさておき、一向に口を開く気配のない父に「お父様？」呼びかけると、ようやく目を開けた。

瞳にちらつくのは――苦悩。五十歳にはまだ届かない父だが、今の瞬間にもものすごく老け込んでしまったような気がした。

ティアロの胸騒ぎはさらにハッキリしたものになる。聞いてはいけない――聞かない方がいいことなのだろう。単なる採用条件の話ではなく、もっと根深い何かが、そこにはあるのかもしれない。

慇懃無礼で嫌味で人の考えや情緒をまったく理解しないあの男は、ティアロにとってはただの口うるさい使用人ではない。

父が見ているジースとは、いったい何なのか。それは自分のまったく知らない新しい一面なのだろうか。それとも、ただ見方を変え

ただで、コインの表裏のように結局は地続きの性質なのか。

聞きたい、聞いてはいけない、聞かなければならない――相反する思いがぐるぐると脳を駆け巡る。

「ふう……む」

父の口から弱いため息が漏れた。その弱い声が、思考の波からティアロを引き上げる。

「聞きたいのか？」

やがて諦めたかのように、父が尋ねてきた。重苦しい空気が肌にまとわりついて離れない。「ええ――」無意識に自身の肩を撫で、うなづく。

「……お聞かせ願えますか？」

それでも父は幾分か躊躇っていたが、

「彼は――」

と、ついに話始めた。

とても静かな、ティアロがこれまで聞いたことのない低い声で、

「彼は、お前の――兄だ」

しぼり出すように呟かれた言葉に、ティアロはただ「え？」意味のない言葉を漏らすだけだった。

「そいつ」は人目を避けるように移動していたが、事前にある程度の行動範囲は把握してある。見つけるのは簡単だった。全身を覆うローブは自身の姿形を隠すにはちょうど良いかもしれないが、王都でそんな格好をして歩けば嫌でも目立つ。追われているのだから普通ならもっと警戒してもいいものだが、そんな素振りはいま一つなく、拍子抜けしたほどだ。

今まで警備隊が「そいつ」を見逃していたのも、無関心が服を着て歩いているようなスラム街の住人の中に紛れ込んでいたからだだろう。でなければ、こんなにも薄汚い存在が生きていて良いわけがな

い。

あのような底辺で這いつくばってただ生きているだけの人間と——マチルディアと、ミンセット家の大事な一人娘であるティアロお嬢様が付き合いを持っているなど、非常に許しがたい——否、許してはいけないのだ。

恥知らずなマチルディアは、向かいの通りのさらに奥の路地へ入り込み、熱心な様子でごみの山を探っている。なんと汚らわしいところか。残飯を掴んだ手でお嬢様に触れたのかと思うと気が狂いそうだった。何故あのような存在が許されている？ あんなのは世界の生んだごみだ。ごみは排除されなければならない。

かみ締めたくちびるがギリツと音を立て、握った拳が白くなる。怒りによって身が震えていた。切れ長の瞳はますます鋭さを増し、薄汚いゴミを漁る汚らしい女を遠くから睨み続ける。

ちょうど仕事が一息に入る時間だ。食事街はどここの店も盛況で、通りには空席を待つ人の列も見られる。自分に気づくことはまずないだろう。はたから見れば喫茶店の外テーブルでコーヒーを飲んでいる一介の客に過ぎず、人の流れも途切れないため視界も悪い。

——なのに。

ティアロの世話役……ジースは息を呑む。

先ほどまでごみを漁っては腐った残骸を口に放り込んでいたマチルディアが、じっとこちらを見ている。

……いや、見ているはずがない。

たまたまこの方向に視線を向けているだけ——そう自分に言い聞かせるも、肌が、自分を見つめる確かな視線を感じている。ローブの下に隠されているはずの瞳に射抜かれて、ぞわりと背筋が粟立った。

気づかれるはずはない——だが一度突き刺さった視線の刃は容易には抜けず、ジースをその場に縫い付ける。

——に。

マチルディアは口角を持ち上げて、嗤っていた。何故こうも離れ

ている場所で彼女の表情が鮮やかに判断できるのか分らなかったが、確かにこちらを見て、嘲笑を含んだ笑みを浮かべている。

そしてゆっくりと口を動かして、

……い つ で も 来 な さ い 、 ぼ う や。

「っ——！」

悪寒が最高潮に達し、思わず席を立つ。テーブルが揺れ、一口も飲んでいなかったコーヒーがぼしゃりと床を濡らした。周囲の動揺も目に入らない。気づけば、肩で息をしている自分が居た。

「あの……お客様？ 大丈夫ですか？」

「——気にしないでくれ」

店員を一瞥してマチルディアへと視線を戻すと、もう彼女はそこには居なかった。見失ったことに刹那心臓が跳ねたが、事前に警備隊には連絡している。警備隊連中の顔などいちいち覚えてはいないが、私服でこの雑踏に紛れているはずだ。余程の愚鈍でない限り——スラムでは一度取り逃がしているが——すぐにマチルディアは見つかるだろう。「街中」ならばまだ、彼らに地の利がある。

ジースはそっと喫茶店を後にする。

マチルディアは危険だ。得体が知れないという問題ではなく、動物としての本能が告げている。危険だ、近づくな——。

ぎり、と歯が鳴る。

ミンセットにそのような穢れた血が近寄ることは、耐え難い苦痛だ。早くお嬢様から遠ざけなければいけない。

ジースの頭の中では、ただそのことだけがぐるぐると巡っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9011f/>

腐幸のマチルディア

2011年2月23日00時55分発行